



生の断念 へ人よ、 動物からの脱皮を

桑原啓善

不戦のための詩朗読と講演会・記録

1984・3・25 (広島) 平和記念館

『人類の最大犯罪は戦争』所収

目次

一、日本の危機

二、戦後文学の検証

三、生を断念した死刑囚について

四、この「生の断念の時代」に

文学は何をすることが出来るか

(注)



一、日本の危機

今は終末？ それなのに日本人は……

● オーストラリアのシドニーの小学生の48%は、二十五才までに死ぬと信じているそうです。アメリカでの調査の結果もほぼ同じです。また、日本の小学生の70%は、もうすぐ戦争が起こると脅えているそうです。これは「終末」と呼ぶべき時代に、いま吾々があるという事ではないでしょうか。

森有正著の『思索と経験をめぐって』には、日本に來た若いフランスの婦人が、「第三発目の原爆も日本に落ちる」と言ったということが書いてあります。理由は何も書いてありませんが、恐らく、「日本人が贅沢に馴れて、大事なものを失っている」ということ、また「自分の国の防衛を外国に依存して平気である」ということ、そこに外国人の目から見たら、危うさを感じるということではないでしょうか。

日本に在住している中国人がこう言っていました「中国人は自分を抑えるということを知っているが、日本人は知らない。その証拠には、中国人に酔払いはいないが、日本人には沢山いる。サラ金のはやるのも、腹八分目の節度を知らない、日本人の習性ですよ」と。

成人の日に、「二十歳の青年100人に聞く」という番組を、大橋巨泉の司会でやりましたが、異口同音に、平和憲法支持、自衛隊の現状支持と答えていました。巨泉氏が、「それでは戦争に巻き込

生の断念 〈人よ、動物からの脱皮を〉

まれる恐れがあるが、そうなたら、君達は戦争に征くか」と尋ねたら、「イエス」は2人、98人は「ノー」でした。何も戦争に征くことをほめるわけではないが、日本人は嫌なことは人まかせで、自分はその影にかくれて安穩に暮らすという習性を、身につけてしまったのではないでしょうか。

ギャラップの調査によると、「国のために喜んで銃をとるか」の問いに、アメリカ人は71%、イギリス人は62%が「イエス」と答え、日本人はただの22%でした。中高年層も含んでいるから、青年だけなら、もっと少ない数になったでしょう。特に日本人の若い層に、日本人が弱々しくなった体質が食い込んでしまっています。

フランスの若い婦人が言った「三発目も日本に落ちる」という一種の予言は、もう殆ど嘘ではない、現実の問題として、吾々日本人の上に迫っていることを、私は肌身で感じています。

米ソ核戦争の危機は、ひたひたと私達の身辺まで

●私は神奈川県逗子市に住んでいます。いま「池子もんだい」という事で、市民がおののいています。逗子の郊外に池子という米海軍の弾薬庫があります。そこは二九〇ヘクタールもある原生林で、米軍が、近々返してくれるという事で喜んでいたら、政府が其処に一〇〇〇戸の米軍住宅を建てる方針をうち出したのです。市長が先頭に立って、市民と一緒に反対運動を始めました。で、市民の反対署名を集めて、それで市の態度を決定しようということになったのです。いよいよ署名と

いう段階になって、おかしな雲行きになってきました。市が市民に対し、本当に本人の署名かどうか後で電話で確認すると言い出したのです。これは署名に対する一種の圧力です。そんな事があって、間もなく、市長の態度が豹変しました。米軍住宅の建設を認めるというのです。恐らくこの背景には、国の強い圧力があつた事が想像されます。「何故？」……

●なぜ、政府は池子に一〇〇〇戸の米軍住宅を建てなければならないのか。その回答は、アメリカ側の次の言葉が明晰に語っています。市民が「狭い逗子市に、一〇〇〇戸の米軍人が住んでは、風紀が乱れて困る」と反対したら、アメリカは「その心配は無用、此処に住むのは、アメリカのインテリのトップクラスです」と。軍人以上のトップクラスのインテリとは何か。吾々はハタと思ひ当ります。青森県三沢のF16戦爆機には、一機あたり五十人のコンピューター要員が必要なのだそうです。すると、池子のトップクラスのインテリとは、電子関係技術者であつて、隣接する横須賀市にその必要性が急増したということではないか。

そういえば、昨年一年間に、アメリカの原潜23隻が日本に寄港しています。これはベトナム戦争最盛期の21隻を上まわる急増です。それに、アメリカは原潜の一部に既にトマホーク（艦船から発射する巡航ミサイル・戦域核兵器）を装備している、近々すべての原潜にトマホークを装備する予定であると発表しています。

池子の米海軍住宅とは、これらトマホーク関係の技術者に違いありません。トマホークは超低空で飛行できるので、レーダーにかからない、いわば見えない恐ろしい核ミサイルです。しかも命中率は百発百中と云われます。そのためには、高度のミニ・コンピューターがミサイルの先端に装備

生の断念 〈人よ、動物からの脱皮を〉

されています。それに、米海軍は目下大いそぎで、アメリカ全艦艇に、このトマホークの装備を急いでいます。ということは、今後、横須賀に寄港する艦艇はもとより、日本近海を遊弋するアメリカ艦艇は、みなトマホークを装備しているということになります。これでは急拠、日本の寄港地付近に、トマホークの電子技術者を確保しておかねばならぬわけです。しかし、このことは日本の命とりにもなりかねない恐ろしいことです。

世界あちこちで上がる反核運動の狼煙のろし

● 皆さん、一昨年の三月、広島で反核大集会があつたのを覚えておられますか、五月には東京で三十万の集会、そして三千万人の署名運動が併行して行われました。あれは何故あんな大騒ぎしたのでしょうか。原因はヨーロッパにあります。その前年の秋、西独のボン三十万人の集会から始まつた反核運動が全世界に拡がったのです。なぜまたヨーロッパから？ その原因はソ連のSS20です。この強力な中距離核ミサイルが東欧に配備され、西ヨーロッパ全域はその射程距離内に入ったのです。それだけならいいのですが、アメリカはこれに対抗して、やはり中距離核のパーシングⅡや巡航ミサイルを西欧に配備すると言いだし、ここに西欧に限定核戦争、つまり米ソ本国を聖域化した他地域での核戦争、その危険性が西欧に起こりそうになつたのです。

なぜ、またそんな……：……：そうです、実は一九七〇年代はデタント時代（米ソ冷戦の緊張緩和時代）と言われ、二つのSALT、戦略兵器制限協定が米ソ間で調印され、吾々はすっかり安心していた

わけです。ところがそのデタントが、全くの食わせものだったのです。その間に、米ソは鍋しゆきを削つて核兵器技術の革新を進め、命中精度と一基のミサイルから一度に多数の核弾頭を発射できる技術の開発に成功したのです。その結果、核兵器は、狙ったものだけを正確に攻撃できる兵器、つまり使える兵器となり、米ソは外地で現実核戦争をやる政策に転換したのです。これが限定核戦略です。そして、その戦略のチャンピオンの核兵器が、ソ連のSS20です。何となれば、これはアジアからヨーロッパ全域を射程距離内におき、命中精度もよく、しかもトレーラーで自由に移動でき、しかも一度に三発の核弾頭が発射できるのです。ソ連はこのミサイルを、一九七七年から毎週一基つつ作り、今や欧州に約二五〇基、アジアに約一五〇基配備するに至っています。

●だが、いま限定核戦争の最も危険な場所は、極東、この日本周辺に移りつつあります。何となれば、アメリカはSS20に対抗できる中距離核が極東にないので、そのためにトマホークを、西太平洋、特に日本周辺に重点的に配備しようとしているのです。

前に申した通り、アメリカがアメリカの全艦艇にトマホークを装備しようとしているのは、トマホークがSS20以上に強力な中距離核だからです。第一に見えない、正確無比だけでなく、潜水艦から水中発射できるから、移動核基地です。これはソ連からすれば、手のつけられない恐ろしいものです。しかもアメリカは、これを日本周辺に重点配備しようというのは、周辺が海に囲まれ、トマホークを積んだ艦艇には願ってもない都合のよい領域であること、また、非核三原則の日本の土地には、一基のミサイルを置く必要もなく、しかも日本を完全な核基地化することが可能だからです。

中曽根首相がアメリカで、日本列島を不沈空母化すると大見得をきって、帰国後あたふたと取り

生の断念 〈人よ、動物からの脱皮を〉

消しましたが、あれは嘘どころか、真実、日本列島の運命を、ホンネを思わずポロリと洩らしたものです。日本列島はほどなく、トマホーク米艦艇でとり囲まれ、不沈空母・移動核基地化します。

まともに日本が核戦争の標的にされる

●そして、その運命は、フランスの婦人が指摘した通り、「第三発目の核」を受ける限定核戦場です。その口火は、意外な所、たとえば中東紛争からでも一直線です。たとえば、今朝のニュースで、イラクがペルシヤ湾のイランの石油積出し基地、カーク島付近で、イランのタンカーを空爆したという事です。これは日本の危機に直結します。

イランはこう言っています「カーク島が攻撃されたらホルムズ海峡を、つまりペルシヤ湾を封鎖する」と。イラクは「必ず攻撃する」と言っています。これに対しアメリカは「ホルムズ海峡が封鎖されたら、直ちに干渉する」と言っています。これでは日本は間違いなく核戦場となります。何かかという、ウラジオストックにいるソ連の艦隊は、アメリカに対抗してすぐ出動するからです。とすれば、アメリカは直ちに日本周辺の三海峡（対馬・津軽・宗谷）を封鎖するでしょう。もうソ連からの核攻撃は在日米軍基地めがけて必至となるでしょう。

実際、日本版『その翌日』のシナリオが、最近発表されました。それによると、「米艦からトマホークをソ連基地へ発射した」想定で、ソ連から四発の小型水爆が、在日米軍基地、東京・横須賀付近に落下。その結果死者六〇〇万人、死の灰による原爆病患者は数しれず、となっています。唯四発

の小型水爆です。そして「限定核戦争は絵空事でない」としめくくっています。

まさに不沈空母日本の、間近い縮図がここにあります。そして小学生すらその予感を、70%の子供達が「戦争はほどなく起こる」と脅怖感を示しています。成人調査(昭57・10月NHK)では、78%が「戦争に巻き込まれる危険」を訴えています。

自分で危機を引き寄せている、それが私達ではないのか

●なぜ、こんな馬鹿げた事が日本に起こるのですか。日米安保があるからです。アメリカに日本が基地を貸しているからです。なぜそんな危険な安保を日本は結んでいるのですか。それは「アメリカに強制されて……」。そうではありますまい。日本人で安保の支持者は、国民の74% (昭58・11月毎日新聞調査)。こんなに多いのは国民がそれを望んでいるからです。何故？

腹の底では①アメリカの核の傘で安全 ②安上りの軍事費で経済発展。恐らくこういう事でしょう。これは何というズルイ考え方でしょう、「他人の種で相撲をとる」とはこの事です。自分は平和憲法で、「戦争反対、軍備反対、核反対」と良い子になりながら、現実には他人の核兵器で自国の安全を守って貰っているわけです。しかし、安い軍事費で余った金で、うまい物を食い、海外旅行をし、セックス遊戯に耽っているわけです。

これはズルイというより、フヌケ者の考えです。「相撲をとる」のは、自分でなくてアメリカ人です。つまり、自分の生命を他人にあずけて平気でいるフヌケ者です。フヌケならまだしも、これは国を

生の断念 〈人よ、動物からの脱皮を〉

必ず滅ぼすウツケ者の条約です。

第一アメリカが本気で日本を守って呉れるでしょうか。あれは、昭和二十五年の朝鮮戦争で、アジア防衛の手薄さを痛感したアメリカが、急遽、警察予備隊（自衛隊の前身）を作って日本を再軍備させ、他方、対日講和条約を結んで日本を独立させ、日米軍事同盟化のため、日米安保条約を作ったものです。それはアメリカの安全のため、アメリカが作った、アメリカのアジア防衛体制の一環です。

「只ほど高くつくものはない」と言いますが、まさに、安保条約によって、日本は精神をフヌケにし、核戦場化によってその生命を失い、確実に国を滅ぼす、「ズルクて、フヌケで、ウツケ者」の亡国の条約です。それを国民の74パーセントが支持するとは。

●その点、中曽根首相は「さすが」といえます。一昨年の首相就任時、外人記者むけの英文パンフレット『私の政治生活』の中で、こう記しています。

「私は安保条約が調印された時、他国の庇護に馴れて、国民が自らを守る意志を失うことを最も恐れた」「真の独立国は自国の領域防衛を、他国の軍事力に大きく依存する道を選んでいる限り、不可能だと信じている」。ここまで、中曽根首相の予見は当たっています。国民が腑抜けになつて、亡国への道を辿るといふ点では。それは二十歳の青年100人の中、すすんで国を守る者二人、あのテレビの回答の中に明瞭に出ています。しかしその後がいけません。

「私は永い間、自衛能力の保有に疑問の余地を残す憲法は改正すべきだと主張してきている。この後も、私の考えは変わらなかった」と。これは「いつか来た道」、危険な軍事国家、亡国の道ではあ

りませんか。

● いったい日本はどうしたらよいのだろうか。非軍事国家・安保の道は、国民がフヌケになり、日本列島は核戦場となり、国は滅びる。中曾根路線は、軍事国家、戦争、亡国の道。日本は今この二つの間で揺れ動いています。それは何れをとつても危険な亡国の道です。

しかし、この二つの道は別々の道に見えながら、実は、一つの道なのです。つまり二つは同じ道、同じ穴の貉むじななのです。

なぜか？ 危険の原因は、この二つの路線の根底にある共通の一事です。即ち、「国の安全は、軍事力で守る」これです。人類が五〇〇〇年の間、頑迷にも信じてきた「自己の安全は、武力でなければ守れない」この誤信です。安保はこれを「他人の禰たぬきでやろう」とし、他方は「自分の禰たぬきでやろう」ただその違いです。

敗戦の教訓

● 私は、いったい、日本は敗戦から何を学んだのか、つくづくこの事を考えると嫌になります。恐らく、国民が敗戦から学んだ事は次の三つでしょう。①戦争はもう嫌だ、コリゴリだ。②アメリカと戦って負けたのだから、アメリカと仲良くしなければ駄目だ。③日米の物量差で負けたのだから、経済力は大切だ。

だから、戦後の国民は、アメリカと仲良くして「安保」を結び、嫌な戦争ゴツコはアメリカに委せ、

生の断念 〈人よ、動物からの脱皮を〉

経済成長、使い捨て経済にうつつを抜かしているわけです。

然し、中曾根氏が学んだのは、一点で違っています。②アメリカと仲良くする。③経済力は大切、この二点は同じです。しかし①「戦争はもうコリゴリ」中曾根氏はこの一点は学んでいません。

しかし、両者は、肝心なものを学んでいない点では全く同じです。即ち、「日本はなぜ負けたのか」この回答は、「日本が武器をとったから」これです。つまり国民も中曾根氏も、敗戦から、国を滅ぼす道だけを学び、肝心の国を生かす道は何も学ばなかったのです。

そして、その責任の大部分は、私は文学にあると断定したいのです。何故か？「戦争とは何か、平和とは何か」このような根源的な問いをもち、それに答えるのは文学の仕事だからです。政治家や財界人や科学技術者や、まして庶民の仕事ではないでしょう。根源への「問い」を問うために、本来「文学」はあるのではないのでしょうか。

二、戦後文学の検証

私も出席したムンムン熱気溢れたあの集会

● 一昨年（一九八二年）の三月三日、東京・神田の教育会館で「核戦争の危機を訴える文学者の集い」